

第2章 青年・若者をめぐって



写真でみる喫茶わいがや④
喫茶わいがやの自立式看板

成人式や国立市民まつりなど、地域に出張出店する際にも、店頭立つ喫茶わいがやの自立式看板は、1980年頃（写真上）から少しずつ作り替えられながら、今も店の前に立っている。現在の看板（写真右）の上になっているコーヒーカップのキャラクターはシンボルの存在の「わいがやくん」。（井口啓太郎）

（写真：上：青年室保管、下：和田萌花撮影）



わたし視点のコーヒーハウス

和田 萌花



私は、大学1年生のとき喫茶わいがやからコーヒーハウスに関わり始めました。かれこれ3年のほどコーヒーハウスに関わり続けています。3年間で、この1年は最もコーヒーハウス向き合った時間でした。卒業論文で「大学生に対する地域の居場所」としてのコーヒーハウスを取り上げました。今回はその内容とこれまでの私自身の経験から、若者の居場所としてのコーヒーハウスについて書いていきたいと思います。

(1) インタビューから

卒業論文を執筆するにあたって、スタッフにインタビューをさせていただきました。ここでは、インタビューを通してコーヒーハウスがどのような場所であるかを、私なりにまとめました。

コーヒーハウスは、「いろいろな人々が集う場所」

私自身も活動に関わっている中で、年齢や境遇、考え方など様々な人と関わることができている感じています。インタビューでも、メンバーやスタッフとの関わりを通して、多様な価値観や立場の人がいることへの気づきや理解が深まっている様子が見られました。多様な人があることへの気づきや理解から「自分に素直になれる場所」、「自分の苦手意識やコンプレックスを気にしすぎず、自分自身に余裕が出て来た」という言葉を出てきていました。いろいろな人

がいるからこそ、ありのままの自分を大事にできているのかもしれませんが。また、こうした気づきは自分が持っている価値観が形成されてきた過去を振り返るきっかけにもなっていると思いました。また、「青年室みたいなどころでいろんな人がいて、結構突拍子もないことが起こるっていうか、そういう方が面白いなって思うようになりました」という言葉から、様々な人があるからこそその面白さや難しさを感じていた様子も見られました。さらに、こうした人との関わりを通して自分がこれまで生活してきた環境を振り返っていることにもつながっていました。

人との関わりは、多くの発見や学びを得ることにつながるのだと思います。それは、人から教えられるものではなく自分で気づき、得る唯一のもので。これは、社会に出ていく若者にとって大きな財産になるのではないのでしょうか。

コーヒーハウスは、「自由な場所」

距離を置きたいなと思ったら離れることもできて、来なくなったら来ることもできる、自分の意思で距離感を変えられることもコーヒーハウスの魅力だと思います。学校や家は、行かなければいけない、居るべき場所といった強制力を感じる場所ではないかと私は思います。インタビューでも、学校や家に居心地の悪さを感じていたり、人間関係に悩んでいたりする若者の姿が見えてきました。また、「強制的に行かされ

ていたら続けていなかったかもしれない」という言葉からも自発的に参加できることが活動を続けていることにつながっているとと言えます。また自発的に活動できるからこそ、自分の興味があることを企画したり表現したりすることに夢中になれている姿がありました。

いつでも来たくなったら来られる場所、であるからこそ自分の抱える苦しさや悩みからコーヒーハウスは時に逃げ場となり、時に解消する場となり、自分らしく居られる場所になるのではないのでしょうか。

コーヒーハウスは、「身近な場所」

インタビューから、「コーヒーハウス」が生活に深く入り込んでいる様子が見られました。「学校・家・学校・家…みたいな生活」になっていたところから、「コーヒーハウス・学校・コーヒーハウス・学校…それから家に帰る」という生活に変わったという言葉や「学生のときは毎日いた」という言葉からもその様子が見えてきます。また、「特に物理的な距離として家と公民館が近いというのは大きいかな」という言葉や「結局一番近い所に来たのかな」という言葉から、活動を続けている要因としても、距離は1つの要素であることが分かりました。

コーヒーハウスは、自分の生活の近くにある身近な場所であるからこそ、気軽に足を運ぶことができ、生活の中に入り込んでいるのだと思います。生活に深く入り込んでいるからこそ、そこに関わる人々と深くかかわることができ、前にも述べた人々との交流を通じた気づきや学びにつながるのではないのでしょうか。

(2) わたしとコーヒーハウスの関わりから

この1年で私もコーヒーハウスでの活動を通して自分自身を振り返ることができました。大学だけでは、きっと出会うことがなかった様々な人々と触れ合うことができたことが自分にとって一番大きな出来事であったと思います。

大学に入ったばかりの私は、初対面の人と関

わることに苦手意識を抱いていて、大学生活もとても不安に感じていました。大学での授業をきっかけに、喫茶わいがやのスタッフとして足を運ぶようになってからは、青年室にやってくる様々な人と少しずつ関わるようになりました。ここでの交流を通してこれまでは学校の友達や先輩、後輩、家族といった限られた人としか関わっていないことに気づかされました。コーヒーハウスは、年齢もそれぞれが置かれている環境も全く異なっていて、そこから得られる気づきや面白さを感じるようになりました。わいがやや青年室での交流は、私に様々な人と関わることの面白さを感じさせてくれました。

私自身が感じた気づきをもう少し詳しく書きたいと思います。活動を通して、できないことをそれぞれに補い合えばいいということに気づくことができました。まだ関わり始めて間もない頃、わいがやで他のスタッフが注文を受けた後、スムーズに準備できるように自分が気を利かせてやったことに対して「ありがとう」と、とても感謝されたことがありました。飲食店でバイトをしている私は当たり前のことをしたつもりでした。自分が当たり前だと思っていたことがこんなに感謝されることに驚きうれしさを感じたことを覚えています。小学校から高校まではできないことを無くし、できることを増やしていくことを求められていたように思いますし、できることが当たり前のように思われていたのかもしれませんが、もちろんできることを増やす努力は大切ですが、常に続けていくことは大変なときもあると思います。だからこそ、ここで頑張り過ぎず、お互いにカバーし合えばそれでいいんだと気づいたとき、肩の力がぬけるような感じがしました。

喫茶わいがややコーヒーハウスでの活動を通して、「自分にもこんないいところがあるのかもしれない」と思ったことは自分にとって大きな出来事でした。私は自分を他人と比べて、「ここが自分はできていないな」ということを思うてしまうことが多く、それで沈んだ気持ちになってしまうことがよくあります。これまでの経験

の中で身につけたであろう、この考え方を自分で直すのは難しいと感じていました。だからこそ、ここで誰かに頼りにされたり感謝されたりした出来事やそれによって感じた喜びや達成感は、自分にとってとてもプラスになっていると感じています。

コーヒーハウスは「自分に優しくなれる場所」

私にとってコーヒーハウスはそんな場所です。

(3) 最後に

卒業論文でのインタビューと私自身の経験をもとに「コーヒーハウス」を見てみると、特に人との関わりは、若者に大きな影響を及ぼすのではないかと感じました。コーヒーハウスには、いろいろな人が一緒に活動をしています。だからこそ、そこで刺激を受けたり考えたり、自分自身を振り返るきっかけがうまれたり、様々なことを私たちは考えることができるのかもしれない。最近、

あるテレビ番組で乙武洋匡さんが、現代社会が「ジグソーパズルのような社会」になればいいということを抑っていました。「ジグソーパズルのような社会」とは、それぞれの得意なこと不得意なことを補い合いながら、物事を1つの形にしている社会のことを指しています。この言葉が、当時卒業論文を書いていた私にとって非常に印象的な言葉で、コーヒーハウスはそれに近い場所なのではないかと感じました。私自身もコーヒーハウスでの経験から、一人ひとりの得意なことや苦手なことを補い合いながら、みんなで1つのことが成し遂げられれば、それで良いのだと思えるようになってきました。

そんなふうに、肩の力や抜いたり、少し自分に自信が持てたりする場合は若者が社会の中で生きていくうえで、必要な場所なのかもしれません。

(わだ・もえか=コーヒーハウススタッフ。大学での授業をきっかけにコーヒーハウスに細々と関わり続けています。現在は、喫茶わいがやにふらっとコーヒーを飲みに行くことが多いです。)

カウンターの野花

国本 隆史

帰省するたびに町並みの様変わり息を吐き、たまにわいがやで息をつく。営む人は変わっても立ち寄れる場所があることは、移民にとって心の安定をもたらす効果があるのかもしれないと思う。ふとした時、店の隅っこで「暑いですね」とパタパタ扇いでいた人を思い出す。「家の近くに咲いていたんですよ」とお花を摘んできてくれたこともあった。もてなしの形は人それぞれ。カウンターにひっそり咲いていた野花。わいがやと青年室に関われたことに感謝し、今も空間が引き継がれていることが嬉しいです。

(くにもと・たかし=映像作家。1995年～1996年、2004年～2008年に、わいがや、YYWに関わる。)

うっかり足を踏み入れて16年

小松 知実

たまたま自分が聞いていたラジオに出演されていたワニさんが青年講座に来ると知り、うっかり足を踏み入れてしまった青年室。当時は社会教育なんて全く興味をもったことがなかった高校生でしたが、同世代の人がいつも集う青年室に居ること自体が楽しかったですね。真面目な話もしましたが、青年室にいる仲間と遊ぶことはばかり考えていた。どこもかしこもスタッフが足りず、いくつも掛け持ちしていることもあったような気がするけど、結局終わった後に飲みに行くのが楽しかったから、関わっている期間ずっと楽しかった。当時の仲間は今でも付き合い有るし、本当に感謝しかないです。40周年なんですね。おめでとうございます。

(こまつ・ともみ=株式会社朝日オリコミに務める。わいがやに関わってきた期間は1987～2003年頃。わいがや、学習班・スポーツ講座(青年教室は数年です)、青年室活動。)

若者の「生きづらさ」と コーヒーハウス実践

南出 吉祥



はじめに

「大人になること」がもはや自明でなくなったこの時代において、子どもでも大人でもない「若者」たちは、さまざまな困難に直面させられている。非正規・不安定雇用、貧困、社会的孤立など、困難の現れ方はそれぞれ異なるが、そうした困難さは若者全般に一様に生じているわけではなく、家庭環境や病気・障害、外国ルーツなど、各種の社会的不利益などを背景としてもたらされている部分が多い。

子どもと大人の過渡期にある若者期は、社会的な立ち位置も流動的であり、もともと不安定さを伴う時期であるが、その不安定さと社会全体の不安定さが重なり合い、若者の間にさまざまな「生きづらさ」を生じさせている。そして、とりわけ不利な状況に置かれた若者たちのところに、社会的な矛盾のしわ寄せが押し寄せるといった状況が広がっているのである。

そういった社会状況に対し、2000年代以降はさまざまな支援が展開されるようになってきているが、それらは量的にも質的にも課題を抱えている部分がある。その背景には、経済活動が中心に据えられた社会全般の風潮や、公共的な施策を市場化していく流れなど、現場レベルだけでは解決しえないさまざまな課題があるが、そうした大きな社会課題とともに、現場に根ざした実践のありようをめぐる攻防が展開されてもいる。

その一端として、若者支援をはじめ、若者に

かかわるさまざまな活動に取り組んでいる実践者の全国的なネットワーク組織である若者協同実践全国フォーラムでは、「支援から協同実践へ」というテーゼが掲げられている。そこには、狭義の「支援」には収まらない多様な実践が展開されるようになってきているという実態の拡がりという側面がまずあるが、同時に「支援者が若者を支援する」という一方向的な関係ではなく、若者の生きづらさを生み出している困難状況を、当の若者と支援者がともに協力しながら解決していくという双方向的な関係が必要であるという実践理念も込められている。

その観点に照らしてみると、コーヒーハウスの実践は、紛れもなく「若者協同実践」であると言える。そこは、障害のある若者をはじめ、さまざまな生きづらさに直面している人びとが多く集う場であり、その場があることで救われてきた若者もたくさんいるという機能面で見れば、カタチだけの「若者支援」機関よりも、よっぽど若者を支援している場であると言えるだろう。しかし、ここで「場」という語を用いて示したように、コーヒーハウスでは、特定の誰かが特定の誰かを支援するという固定化された「支援関係」が築かれているわけではない。もちろん、個別具体的な実践場面を切り取ってみれば、誰かが誰かを支えるという一時的な支援はさまざまに展開されているが、それが立場を介して固定化されているわけではなく、相方向にもなるし複線的に絡み合い、全体としての「支え合い

の場」を構成している。

そこで本稿では、若者協同実践という観点から、コーヒーハウスの実践的価値および場の特質について整理し、今後の若者支援の方向性についての示唆を得てみたい。なお、筆者はコーヒーハウス実践に直接入り込んでいるわけではなく、これまでの報告書や実践者の語りから見聞きしてきたことなどをもとにした考察であり、現場内在的な分析にはなり切れていない部分についてはご容赦願いたい。

1. 「若者協同実践」の社会的位置づけ

まず本節では、若者および若者支援をとりまく実情を概観しつつ、そのなかでコーヒーハウス実践も含めた「若者協同実践」の社会的位置づけについて確認してみたい。

(1) 「青年／若者」という括り

冒頭で「子どもでも大人でもない」という、除外規定で曖昧に表記してきた「若者」という括りであるが、それが具体的にどういった対象を指すのかということは、単に制度的な線引きというだけでなく、実践理念にもかかわる大きな問となる。政府による「若者」の定義（「若者支援」政策の対象）は、15～39歳という形で、年齢で区切られたものとなっている。「39歳まで」という上限設定は、主に20代前半までを指す場合が多い諸外国からすればかなり異質なものであるが、日本の若者支援施策は、長年にわたり放置され続けてきた世代に対する措置であるとともに、稼働年齢層を対象とした福祉サービスの不在・狭隘化を補う役割を負ってきたという部分が要因となっている。

さらに近年では、社会の不安定化のあおりを最も受け、各種若者支援施策の主対象とされてきた就職氷河期世代が40代に差し掛かるとともに、「高齢ひきこもり」の存在も認知されるようになり、施策対象としての「若者」という括りは機能しなくなりつつある。もともと無理のあった年齢区分が、いよいよその失効を余儀なくされつつあると言えるだろう。

しかし、こういった対象設定をめぐる問題は、「人」を前提にしてその「年齢」で区切ろうとする表層的な発想に由来するものであり、実践内在的な区分ではない。実践において重要なのは、単に「生きてきた年数」を指すだけの年齢よりも、「どんな経験を経てきたか」という質的内容の部分であり、その意味で焦点は「人」よりも「経験」の方に注がれている。

(2) 「青年期」を奪われてきた人びと

では、どういった「経験」が若者期の特質として問われてくるのか。若者支援の現場では、「青春貧乏」という言い回しがされることもあるが、これは就学や就労などの課題解決に特化されがちな「若者支援」が見落としている本質を端的に言い表している。学校や職場だけでなく、遊びや恋愛なども含め、いろいろな場面で仲間とともに何かに挑戦し、失敗も含めて成功体験を味わう、といった試行錯誤のプロセスを体感する機会を奪われてきたということが、なんらかの「生きづらさ」や社会的な不全感を抱えた人びとに共通する基底になっていたりする。

その経験に着目して「若者期」を捉え直してみるならば、「若者支援」は「困難を抱えた若者に対する支援（若者への支援）」というよりは、「若者期特有の経験を保障する場の提供」（「若者期」を保障する支援）となり、対象は年齢などに縛られるものではなく、「十全な若者期を得られてこなかった者」となる。そして実践の焦点も、「人」ではなく「経験」となり、その経験をもたらし場のありように向けられていく。

実際にコーヒーハウスの実践の核は、喫茶コーナーやアクティビティ・学習会などへの企画運営も含めた「参加」であり、人よりも活動が前に据えられている。他方で、活動の「成果」や持続、あるいは活動への「貢献度」が全面化するわけではなく、あくまでそこに集う人びとの主体性（動けなさなども含めた意味で）も徹底して保持されている。その絶妙なさじ加減の下に成立しているのが、コーヒーハウスの実践であり、若者協同実践であると言えるだろう。

(3) 「支援を受ける」ということのハードル

この対象設定・課題設定は、次節でみるように実践内容そのもののあり方と密接にかかわってくるが、同時に「支援の場」における参入障壁を下げるという機能も有している。社会全体の不安定さが高まり、社会的な自明性が奪われがちな状況下では、自分の周囲においてかろうじて担保されている「あたりまえ」にどうかかすがろうとする心性が強く働き、それを揺るがしかねない「その枠から外れた人」を排除し攻撃しようとする。そのため、「フツーであること」に対する過剰な要求とその水準も高まり、そこから下りられない圧力が課せられてしまう。しかし現実問題として、人びとの生活現実はいきよめて多様であり、何の特質もない「フツーの人」など誰もいない。そこで、「フツー」からはみ出てしまう部分は(家族以外には)ひた隠しにして、「フツー」であるかのように振る舞うというのが、不安定化した社会のなかで生きぬいていくための生存戦術となっている。

そうした風潮があるなかで、「支援を受ける」ということは、「支援が必要な存在」としての自己を受け入れ、「フツー」の範疇から排除されるということの意味してしまう。実態的には、誰も誰かの支援を受けながら日々の生活を営んでいるのだが、そうした日常的な支援とは別に、名指しされ特定化された「支援」は特別視され、支援を必要とする人は異端扱いをされてしまう。そこに、「他人に迷惑かけるな」という自己責任イデオロギーも重なり、「支援を受けること」のハードルはいっそう高まっている。いわゆる「若者支援」の施策はこの間広がってきているが、そこまでたどり着けていない若者の層もかなりの数に上り、そこにうまくアプローチしきれていないという課題が指摘されている。

この課題に対し、コーヒーハウスが掲げるような、「支援」ではなく「活動の機会」が提供される場だという設定、「支援を必要とする人」ではなく「活動を担う一員」であるという立ち位置は、非常に大きな意味を持ってくる。実態としては、複線的・多層的な支援関係が織り込ま

れている場でありながら、「支援」が前面に立つことなく場がひらかれているということは、とりわけ周囲との関係や「社会的まなざし」の影響力が強くなりがちな若者に向き合う実践において、今後いっそう求められてくるあり方だと言えるだろう。

2. コーヒーハウス実践の特質

前節での検討を踏まえつつ、本節ではコーヒーハウス実践の特質を、いくつかの項目に即してまとめてみたい。

(1) 〈いま・ここ〉の充足

まず着目したいのが、時制の問題である。前節で指摘した対象設定・課題設定と密接に重なるが、コーヒーハウスの実践では過去でも未来でもなく、〈いま・ここ〉の充足に重点が置かれている。そのことは、居場所実践などにも通じる点であるが、いわゆる「相談・支援機関」とは異なる場の特質を表している。

相談・支援機関では、相談者が直面している「困難」とその解決に焦点が当てられる。そのため、当該の困難を生じさせてきた原因や背景を探るうえで必要な過去の状態・経験を対話により引き出し、整理する営みが行なわれる。また、それらの困難を解決し、その先の状態へと進んでいくための諸条件の整備や方法の模索、力量形成が行なわれる。こうした相談支援は、ただ日常を過ごしているだけでは得られづらい自己内対話や気持ちの整理、道筋の同定など固有の意義を持っており、居場所活動などと併用して取り組まれることでいっそうの相乗効果が得られる場合も少なくないが、あくまで相談活動は「非日常」の場であり、日常を構成する「現在」へのアプローチは難しい(「日常生活の相談」という場合も、よりミクロな「過去」と「未来」への働きかけである)。

この時制の問題は、「支援の場」のあり方だけでなく、生きづらさに直面している若者たちが置かれた状況にもかかわっている。困難とその要因の内容によって状況は異なってくるが、と

りわけ「漠然とした不安やしんどさ」といった場合には、過去の否定的経験の積み重ねや自身が置かれた社会的属性によって生じてくる縛りなどが要因となっていたり、未来に対する「期待」や成果、目的へと追い立てられる焦りなどが要因となっていたりもする。「これまでの自分」において形成されてきた自尊心の棄損状態と、周囲・社会から期待される「これからの自分」と現実の自分とのギャップという、二重の苦しみの狭間で立場を失っている〈いま・ここ〉の自分を取り戻していくという作業が、多くの実践現場で取り組まれている営みである。その〈いま・ここ〉の自分が確立していくことで、その現在に紐づく形で過去も読み替えられ、その延長線上に等身大の未来が描けるようになっていく。

そうした時間軸のなかに自己を据え直していくための土台として、コーヒーハウスの日常実践があり、場があると言えるのではないだろうか。

(2) 「場をつくる」プロセスの意義

そして、日常実践のなかで育てられているのが、「場をつくる」営み・プロセスへの参加による学びと経験である。これは、知識獲得や訓練など明示的な能力形成とは異なり、外在的な把握は難しく記述も困難であるが、自治・民主主義の能力形成にも連なる重要な要素を含んでいる。

喫茶室では、コーヒーや食事をつくり、提供し、代金を受け取るなどのさまざまな業務があり、その運営抜きに場は成り立たない。しかし、営利・非営利問わず、カフェの運営で大事なものは物理的・実務的な業務（経済的側面）だけでなく、むしろその本質はその場に内在する文化の生成・創造にある。前者の実務のみが先鋭化すると、「できる／できない」という線引きや業績に追われ、能力主義の風潮が広がってしまう。他方で後者の文化的次元が過剰化してしまうと、経済的な面での運営が成り立たなくなるとともに、活動の軸がぼやけてしまい、外部からは入りづらい同質集団になっていってしまう。たえず揺れ動き、時には摩擦も引き起こしうるその両者のバランスを取りながら、日々の活動を続

けていくという営みは、「場をつくる」ということの原点に据えられる基盤となっている。

そして、各種イベントや学習会などを企画実施する営みにおいては、本番当日の成功による喜びや失敗による悔しさという経験がまず大きなものとして残るが、同時にその準備段階における葛藤や対立、試行錯誤のプロセスそのものが、外部からは可視化されず記録や記憶には残りづらいものの、その後の人生経験において大きな糧となってくる。目標やゴールを据えるからこそ、そこに向かって頑張っていく仲間関係が築かれていくという側面があると同時に、目標達成やゴールへの到達それ自体が目的というよりは、実質的には目標設定が手段となり、試行錯誤が目的となっているという内実がある。

こうした模索の渦中では、個々の若者は活動に参加する一人の主体であるとともに、その場を構成する要素の一つでもあり、個人／集団、主体／客体などの分断を生み出す二元論を超えていく契機が含まれている。そのことは、「社会に貢献せよ（社会の歯車となれ）」と迫られる一方、「自分の個性を発揮せよ」という圧力も課せられている社会装置を、顔の見える関係のなかで融解していくという機能として現れてくる。この作用が、漠然とした不安や「生きづらさ」に苦しむ若者を解放し、自分らしく生きていくための糧となっていくのである。

(3) 公民館活動の一端であることの意味

そしてもう一つ、コーヒーハウスの特質として指摘しておくべきは、それが公民館事業の一端として始められ、現在においても場所も含めて緩いつながりを保ち続けているという部分である。コーヒーハウス内部においても、喫茶・講座・自主企画など多様な参入回路が用意され、それぞれ固有の活動・文化を持ちながら輻輳的に重なり合って全体を構成しているが、さらにそれらの活動が、コーヒーハウスの外側にも開かれ展開されているということは、場への参入経路の確保となるとともに、活動が内向きになり過ぎることを防ぐ効果も保持しているといえ

るだろう。

また、「公民を育てるための公共施設」としての公民館と接続しているということの意味も大きい。コーヒーハウスのような実践は、全体からするとごく限られているとはいえ、NPOや福祉団体などにより実施されているケースも全国にいくつかは存在している。しかし、それらのほとんどは「民間の活動」であり、公的な部分との接点があるとしても、目的が別に定められた委託事業の派生、という程度になりがちである。それに対し、「学習主体≒社会形成主体」を育んでいくことが目的として掲げられた公民館という場において、コーヒーハウスのような協同実践が積み重ねられているということは、市場化が進む若者支援業界において問われるべき「若者協同実践の公共性」のゆくえを示唆してくれていると考えることもできるのではないだろうか。

まとめ

以上、いささか思弁的に過ぎるかたちでコーヒーハウスの実践を意味づけてきたが、実際の実践現場は特定の解釈枠組みの範疇のみにとどまらず、むしろそこを絶えずはみ出ていく運動体である。だからこそ、言語化する（＝一定の枠組みに固定化する）ことは容易ではないが、運動が一時期のブームだけで終わることなく、継続し発展していくためには、歩んできた道を意味づけ先を見据えていく作業も欠かせない。

本稿がその作業における一端となるかどうかは措くとして、言語化はけっして文章だけでなく、他者との何気ない会話のなかにも含まれるし、日々の実践のなかにも折り込まれているものである。そのことが、二節で少し触れた「文化」ということに連なっているが、なかなか見えづらく意識しづらい（外からも内からも）この文化が持つ力があるからこそ、コーヒーハウスの実践は継続して若者たちを支える場となり得てきたのだと思う。

学校や労働現場をはじめとした社会一般だけでなく、支援・教育・福祉などの現場でも、「個人の力量」ばかりが問われがちな社会的風潮に

抗して、「場の持つ力」を軸にした実践をどこまで支え、豊かにし、拡げていけるのか。そのことが、個々の現場や若者支援の領域だけでなく、社会そのものの存続可能性に大きく左右するというのは、風呂敷を拡げ過ぎであろうか。ただ少なくとも、コーヒーハウスの実践には、その一端が示されているように思われる。

（みなみで・きっしょう＝伊賀に生まれ、愛知で育ち、東京で学び、岐阜で働く「就職氷河期世代」どまんなか（社会活動に邁進する人も多い世代）。若者協同実践全国フォーラム（JYCフォーラム）事務局長、ぎふ学習支援ネットワーク代表、教育科学研究会『教育』副編集長、岐阜大学地域科学部教員。）

年表の1コマになったYYW

齋藤（滝）まどか

先日『くにたち公民館だより』（2020年6月5日号）を読んでいて、クスッと笑ってしまった。あの当時ノリで決めたYYWの名前が、年表の1コマになっているということに。そしてあれから20年も経ったのか…と時間の流れの速さに驚く。“わいがや”の片付けを手伝った後、仕事帰りに講座へ集まってくるメンバーと、青年室で他愛もない話しをする、そんな時間が楽しかったな。“わいがや”のミーティングは、脳みそがキュツとなる位緊張した記憶も残っている。

（さいとう・まどか＝国立市社会福祉協議会福祉事業課地域事業係。1992年から10年位、学習班、陶芸、料理、YYW、わいがやに関わる。学生の頃『くにたち公民館だより』を読んで、席が後ろだった田口（岡）さんと一緒に青年室へ。あの頃は、ノリと勢いを真剣に実行してました（^_^）

わいがや通信をつくる

久野 千鶴

ひとつ、またひとつ、文章が集まってくる。
執筆を依頼した、わいがや通信の原稿たち。
締め切りより随分前もって送られて来るもの
もあれば、ギリギリまで粘って書き上げられ
たものもある。
会ったことのない人、何年も前から知っている
けど年数回しか会うことのない人、何年も
会えていない人、わいがやでいつも会ってい
る人、色々な人が書いた文章。
それを読む。
プリントアウトしてゆっくり読む。
そこに、書いた人の人柄がうかぶ。思想が見
える。
人間への関心と真心がある。
文章を透してその人を知り、その人とその人
の言葉を好きになる。
その人から見たわいがやを好きになる。
わいがやに関わる人たちを好きになる。
だから、わいがやのために、わいがやの魅力
がありのまま伝える通信をつくりたい。
ありのまま、がとても難しいけど…。
ずばりとは言い表せないわいがやのイメージ
を、たくさんの人の言葉のコラージュで形づ
くる。
記事を書いた一人ひとりの気持ちが生きる誌
面になりますようにと、思いながら。
通信のページに、みんなの言葉を置いていく。
・・・・・・・・

私は、わいがやに出会ったのはもう 10 年
くらい前ですが、スタッフとしてお店に立っ
ていたのは遙か昔の数ヶ月…。今は、わいが
やスタッフと名乗って良いのか？というくら
い限りなくお客寄りの立場で、現役の役割と
しては唯一、わいがや通信の制作時に編集担

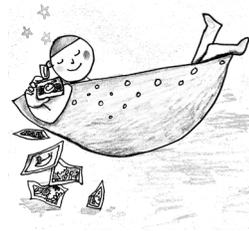
当として参加させてもらっています。

もともとカフェや喫茶店でひとりぼーっと
過ごすのが好きで、わいがやの居心地を気に
入り、たまたま 1 日インターンシップをやっ
てみたことからスタッフになりました。なの
でボランティアという意識もなく、ただただ
楽しくお店に出て、たくさんの人と出会い、
お客としても通い続けて、今もやりたいこと
だけ参加して…自分にとっていいところ取りの
関わり方で申し訳ないという気持ちはずっと
ありつつ、できれば自分もわいがやの役に立
ちたいと思っています。それは、自分にとっ
て必要で大切な相手に、自分も必要で大切だ
と思われたい、ということかも知れません。
だからわいがや通信をつくる作業は、今自分
にできることでわいがやと関わり続けられて、
とてもしあわせです。

わいがやへ行く時はいつも、特定の誰か
ではないけれど、誰かに会いたいと思います。
誰かと、ただ会いたい、話をしたい、時間と
空間を共有して一瞬つながりたい。お互いの
ことを本当には分からないし、何かをしてあ
げられるわけでも、してもらえるわけでもな
いかもしれないけれど。人と自分の、その瞬
間の感情に向き合うことにはきっと意味があ
るし、人と関わることに希望を持っていたい。
わいがやにいるうちに、いつの間にかそう思
うようになりました。

(くの・ちづる = 2009 年 1 月に結婚と同時に名古屋から国立へ越してきて、最初はお客として通っていた喫茶わいがやのスタッフになりました。就職・妊娠・出産などのため、お店に入ることがなくなってからは、通信制作スタッフとして関わっています。)

綺麗事ではない〈共生〉から生まれる 〈歓待〉の空気



阿比留 久美

1. さまざまな人に対する〈歓待〉

わたしが「コーヒーハウス」を初めて訪れたのはもう15年以上も前のことだ。当時わたしは「居場所」をテーマにして修士論文を書こうとしていた。調べているうちに、「居場所」の類似概念である「たまり場」論を掲げて実践をたちあげた国立市公民館の「コーヒーハウス」に行きあたり、見学にうかがったのだ。

どんな人間かもわからない初対面の自分を当時の「コーヒーハウス」のスタッフの人たちは自然なかたちで〈歓待〉してくれた。「よそゆき」ではない普段通りの空気感がありつつ、同時にわたしが「わいがや」や青年室で居心地が悪くならないよう「コーヒーハウス」の情報をそれとなく教えてくれる様子から、わたしを歓迎し、受け入れようとしてくれているのが伝わってきた。

誰かが大切に育てている場を「研究」という名目で訪れ、「観察」し、「解釈」することは時に暴力的なことである。社会教育の実践研究においては、継続的にかかわり続けることが誠実でまっとうな研究方法だと考えていた当時のわたしは、「コーヒーハウス」の人たちに「で、おまえはここにどうかかわるんだ?」「何者なんだ?」と思われるのではないかと、緊張しながら、同世代の人たちがつくっている「コーヒーハウス」の実践を訪れていた。なので、ごく自然にウェルカムな雰囲気でもわたしを受け入れてくれた「コーヒーハウス」の人たちの対応に、内心

ひどく戸惑ったことは今でもよく覚えている。

おそらく、大学院生のわたしが親切に受け入れてもらったのは、これまで「コーヒーハウス」の実践に丁寧にかかわってきた研究者が何人もいたり、「コーヒーハウス」スタッフのなかにも大学院生がいたことにより、研究者の卵に対して肯定的な土壌がつけられていたことも影響していたのだろう。

あれから10数年、わたしがはじめて訪れた頃の「コーヒーハウス」と今の「コーヒーハウス」はメンバーも入れ替わっている、雰囲気もちょっと違う。でも、一番最初にわたしが感じた〈歓待〉は、少しずつかたちを変えつつも今も「コーヒーハウス」に健在のようだ。「コーヒーハウス」に人が惹かれる理由のひとつに、きっと若かりし頃のわたしも体感させてもらった〈歓待〉の空気があるだろう。

2. 綺麗事を超えて他者／自分と出会える 「コーヒーハウス」

わたしが「わいがや」と（薄いながらも）かわりをもちはじめた2004年頃の機関誌『コーヒーハウス』（以下、『コーヒーハウス』）59号では、スタッフのこんな文章が載っている。

私の20代はわいがやに始まり、わいがやに終わったといっても過言ではないだろう。いろんな人に出会った。たくさん笑った。けんかもした。

飲んで泣いたりもした。自分の考えも持つことができたし、それを人に伝えることもできるようになった。それまでの私を知る人は、ほとんどいないが、とにかく目立たないように静かに、いかにも日本人らしく生きていた。表情なんか無かった。わいがやと、ここで出会った人々のおかげで、今ではわいがやが無くて生きていけるほど、安定した日常生活を送ることができている。¹

この文章からは、書き手からみてどれだけ「コーヒーハウス」が大切なのか、「コーヒーハウス」に出会ったことでどれだけ自分が変わり、豊かになったかが伝わってきて、胸を打たれた。修士論文を書くときに過去の『コーヒーハウス』を読み、その後もとびとびながら『コーヒーハウス』を目にしているが、そこではこの文章のように自分自身についての思いや悩みや葛藤がしばしば赤裸々に語られていた。活動やスタッフ・職員に対する率直で時に容赦ない意見が掲載されていることもあった。それは、ときには「残るものなのにここまで書いてしまっているのだろうか」と読んでいるこちらがときどきすることさえあるものだった。

機関誌のなかでそんなふうに自由に意見を述べることができるのは、日常の「コーヒーハウス」で自由に意見を述べる関係性と信頼関係ができているからであろうし、「コーヒーハウス」にかかわる人を通じて／超えて、社会全体への信頼が築かれているからだろう。

そんな自分の意見や感情を表現できるような信頼関係がまだ健在であることを示しているのは、たとえば2017年の『コーヒーハウス』のこんな文章だ。

ある時、コーヒーハウスの活動に長年たずさわってきた先輩の一人が「あの人はしょうがい者だとしても嫌いだ」と口にして、その理由をまくし立てた。密かに痛快な思いがしたと同時に、いろいろと考えさせられた。(略) 他者に対してだけ寛容になるというのでは、単なる綺麗事に過ぎなくなってしまう。自分の感情に対しても正直になる。(略) コーヒーハウスに関わる人たちには、正直な人が多い。長い目で見た場合、うまくやっ

ていくためのコツはその辺りにあるのかな、と最近になって思うのだった。好きな人もいれば、嫌いな人もいる。その中で、自分の周りを自分が好きな人だけにしない。いってしまえば、それだけのことなのだ。²

誰もがいろんな肩書きや立場を持って生きていて、「コーヒーハウス」のなかでもスタッフとかメンバーとか社会教育主事とか立場は異なる。

しかし、「コーヒーハウス」はそんな肩書きや立場を超えて、ポジショントーカー綺麗事—でごまかすことなく、ただの〈自分〉として〈誰か〉や〈なにか〉とかかわり、正直に自分の感情や考えを表現することができる場なのだろう。同時に、「コーヒーハウス」は、自分の感情を正直に吐露することが、異なるものの排除につながらない場でもありそうだ。

『コーヒーハウス』では、「コーヒーハウス」の運営についても、きわめて私事的な自分ごとについても、正直で率直に自分の意見や感情が表明されている文章がよく登場する。『コーヒーハウス』71号(2019年)では「非モテ」男子の叫びが、「魂の叫び」とも言えそうな熱量で綴られており、わたしは、こんなふうに安心してあけすけに自分のことを表現できるなんて、「コーヒーハウス」はなんてシビれる素敵なお場なんだ！と心から感動した。

本冊子の橋田慈子さんの文章ではメンバーの女性の一人暮らしをしたいという気持ちに、〈支援—被支援〉の関係ではなく、仲間として応答してきた橋田さんの様子が描かれている。

綺麗事を超えて、上下関係や〈支援—被支援〉関係とは異なるフラットな関係を目指しつつも、同時にそこに居る人たちが自分に正直に「居る」ことができる場であること——わたしがはじめて「コーヒーハウス」に来た時に感じた〈歓待〉の雰囲気は、「コーヒーハウス」のそんな性格をあらわしていたのではないだろうか。

3. 異なる存在に出会っていく

「コーヒーハウス」で築かれ、編まれてきた〈歓

待)の雰囲気は、日常のなかにある〈共生〉のあらわれである、とわたしは考えている。

〈共生〉という言葉は理念が先行しがちで、〈共生〉が実現されている社会とそうではない社会であればどちらがいいか、と問われれば、誰もが〈共生〉が実現されている社会のほうが良いと答えざるをえないような規範的な概念である。

そして、理念と実践とは往々にして距離があり、誰もが理念的には肯定する概念も現実の生活世界では、どのように実践すれば実現されたことになるのかはなかなかイメージできない部分がある。

しかも、現実の社会は分断や排除がそこかしこに存在していて、社会的マジョリティとマイノリティが分断されていたり、マジョリティの生活世界からそもそもマイノリティが排除されがちであるために、分断や排除の存在に気づきもしないということが日常化している。花崎皋平は、「人間の根本的な不幸とは、いわば存在の忘却のこと」であると記しているが³、わたしたちの生活のなかで、「知らない」「出会っていない」からその存在が「ない」ことになっていることは非常に多い。

そんななかで、「コーヒーハウス」という場合は、学校・職場を中心に生活していたのでは「知らない」「出会っていない」ままになりがちなできごとや人と出会う場であり、自分の知らなかった存在への気づきを生む場になっていると考えられる。公民館というあらゆる人に対して開かれた施設に「わいがや」というカフェ、障害者青年学級、青年室という〈しかけ〉が組み込まれ、そこに若者たちが集うことにより、これまで出会ってなかったできごとや他者と出会う。新たなできごとや他者との出会いをつうじて、今まで気づいて／知らなかった自分に出会っていく。

そのような積み重ねが「人の出会いといえるにふさわしい出会い」を生み、「自己の発見と自己をふくむ現実の発見とが切りはなされないような、自己の問い方と現実の問い方」が可能な関係のリアリティを実現していく⁴。そんな異なる存在に出会っていく構えが、「コーヒーハウス」の実践の中では築かれ続けてきたのだろう。

4. 「コーヒーハウス」流〈共生〉の実践論 —肩ひじ張らない日常で実現される〈共生〉

尾関周二は共生理念の構成要素として以下の8点をあげている—①「同化や排除ではなく、お互いの違いを違いとして承認して生きていく」、②「対立・抗争を認めるが、暴力による解決は否定する」、③「実質的な平等性とコミュニケーション的關係を迫及する」、④「差異のなかでの自己実現と相互確証をはかる」、⑤「〈共生〉の欺瞞を暴露する」、⑥「力關係の対等性」、⑦「お互いの個性や聖域を多様性として尊重しつつ共通理解を拡大していく」、⑧「相互援助、協力から新たな共同性を探る」。尾関によれば①～④は〈共生理念の必要条件〉で⑤～⑧が〈共生理念の十分条件〉であるという⁵。

尾関の提示したのは〈共生〉の理念だが、「コーヒーハウス」の実践を外側からたまに垣間見させていただいていたわたしからみると、尾関の提示する理念と「コーヒーハウス」の実践は重なる部分が少なくない。特に尾関の提示した〈共生理念の十分条件〉の視点から「コーヒーハウス」のありようを見ると、〈共生〉を実質化していく上での重要な視点がいくつも浮かびあがってくる。『コーヒーハウス』では互いを「仲間」だと認識しつつ、その「仲間」關係のなかで本当に「力關係の対等性」が実現しているのかを問う語りかたたび綴られている。同時に、メンバーとスタッフとがプライベートで遊びにいっている様子が描かれたりもしており、堅苦しく「相互援助」し「協力」しあう前にまず信頼できる仲間・友達として關係が形成されている様子も伝わってくる。

それは、わたしからみると、国立市公民館のなかの実践づくりにとどまらない、肩ひじ張らない日常のなかにある〈共生〉の実相であるように思われる。「コーヒーハウス」に集う人たちが、自分の人間くさをまきちらしながら、泣いたり笑ったりしながら共に在る。そんな〈共生〉の実践が「コーヒーハウス」では展開されている。

〈共生〉の理念は20年ほど理論的に考察が重ねられてきているが、排除や分断が進行してい

る現在、〈共生〉を実質化していくための実践論があらためて重要になっている。元国立市民公民館職員の兼松忠雄さんは〈共生〉の実践論をたびたび語られていたが、2020年代の〈共生〉の実践論とはどういうものなのだろうか。

わたし自身は恥ずかしながらまだ自分の生活世界のなかで、日常のなかにある〈共生〉を骨身にしみるような実感をもって経験したことがない。「コーヒーハウス」のことも、表面的にたまたま触れさせてもらっているだけで、よくわかっていない。むしろ、「コーヒーハウス」について論じれば論じるほど、「コーヒーハウス」の実態から離れた語りをしてしまっているのではないかという空恐ろしさがある（だから、かなうことならば、すでに若者とはいえない世代に入ったわたしだけど、「コーヒーハウス」みたいな場で、笑ったり泣いたりけんかしたりしてみたい）。

「コーヒーハウス」の不思議さをわたしは知りたいし、世間の「コーヒーハウス」にかかわっていない人たちにも知ってほしいと思う。だからこそ、あらためて現在の「コーヒーハウス」にかかわる皆さんに「コーヒーハウス」における〈共生〉を論じてほしい。

注記

- 1 『コーヒーハウス』59号、2004年、73頁
- 2 『コーヒーハウス』70号、2017年
- 3 花崎皋平『生きる場の哲学』1981年、32頁
- 4 花崎皋平、前掲書、35頁
- 5 尾関周二「差別・抑圧のない共同性へ向けて」藤谷秀・尾関周二・大屋定春編『共生と共同、連帯の未来』青木書店、2009年、11-13頁

(あびる・くみ=若者協同実践全国フォーラム理事、早稲田大学文学学術院。子ども・若者の居場所と育ち研究がライフワークです。)

あの時期にしか出せない力 高橋しのぶ

高校最後の春休みから20代半ばまで、自分にとっていい時期にコーヒーハウスで活動できたと感じています。社会教育や障害福祉のことを何も知らなかったのが、今思うと頭でっかちだけど怖いもの知らずでもあり、正直思い出したくない自分の姿もたくさんあります。子どもの残酷さとも違う、若者独特の無知やいびつな自我で随分周りを傷つけたと思いますが（私のことです）、あの時期にしか出せない力もあったと今は感じています。時代も大きく変わった中で、障害者支援などの枠組みにはいらないう「わいがや」の存在は稀有になってきましたが、そういうきれいに説明しきれない感じが私は好きでしたし、大切だと思っています。

(たかはし・しのぶ=現在は市内の社会福祉法人多摩棕櫚亭協会で就労支援を行いながら常務理事をしています。関わっていた年代は1988年から95年くらいまで？ 講座は料理講座→学習班→生活講座の順だったと思います。わいがやでは「水曜日の女」でした。)

土門さんの穏やかな笑顔 唐 暁叡

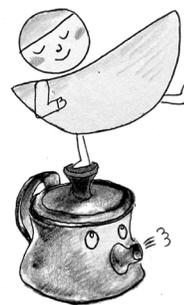
十年前、30周年の記念誌を読んでいた時、やさしい音楽が流れているわいがやで、一緒に出勤している土門さんが少しづつ、わいがやのことを私に教えた。その後、ある日、土門さんが「申し訳ないが、来週手術でこれられないです」と言って、私はびっくりした。その日、私は初めて彼女の病気を知った。長年の辛い病気と数えられないほどの治療と手術を耐えている、優しい土門さんの、皆さんの前に何時でも穏やかな笑顔しか思い出せなかった。私にも、いつも丁寧に日本語を教えた。その時、とても感動した私は、それを最後の面会だと思わなかった。気付いてないうちに、もう十年たった。わいがやで素晴らしい人々との出会いは一生の宝物だ。十年でも、四十年でも、決して、忘れない。

(とう・ぎょうえい=主婦。2009年～2013年、わいがやスタッフ。)

これは労働ではない

—喫茶わいがやについて

入山 頌



0. これは労働ではない

コーヒーを淹れる、注文を受ける、皿を洗う、不機嫌な人の相手をする、まったく腑に落ちないが、なぜか怒られている、これらは労働ではない。そう、なにか別のものなのだ。とにかくお店を開けよう。前日に悔しいことがあって浴びるようにお酒を飲んだせいで酷い二日酔いだが、それでもお店を開けることの楽しさに比べたらたいしたことではない。

アナーキストのボブ・ブラックは、あらゆるものは強制されることで労働になると主張する。しかし、「人々がものごとを楽しんでやろうとすれば、それが労働に随した時に発生する不合理や歪みを十分に根絶できるはず」[ブラック 2014: 37]なのである。

わたしたちがなにかを楽しいと感じたとき、それを忘れずにいよう。コーヒーを淹れるのは楽しいが、急かされると楽しくない。つまりはそういうことである。あらゆるものごとを、強いられないかたちで実践しようとする、それが、労働を遊びに変えるということである [ブラック 2014: 36 - 37]。

しかしこの実践はとても難しい。楽しむことで、確かに労働は遊びに変わるが、それは労働が無くなった代わりに遊びが現れるということの意味しない。実際には、急かされれば早くコーヒーを出せるようになってしまおう。あらゆる営みは、労働にもなれば遊びにもなる、ブラックが示しているのはそうしたせめぎ合いを起こ

すための実践なのである。

ブラックの指摘をふまえると、わたしたちは普段さまざまなことを強制されてしまっている。しなければいけないことをひとつひとつ果たしていくことによって揺るぎない自己をつくりだすことができるという神話のなかに生きている。「人々は人生をまるまる支配され、学校から労働へと引き渡される」[ブラック 2014: 19]のだ。小学校から大学まで、勉強することがたちまち就職すること、労働を担うことを意味してしまう。名前、年齢、出身地、学歴、恋愛遍歴、結婚願望、これらをわたしたちは、人と知り合う過程で頻繁に言葉にしてきたはずだ。人は人の人生に意味を求める。性愛でさえ労働なのかもしれない。人生に余計なことなどなく、全てに意味があると主張した瞬間、わたしたちは家族の、学校の、会社の、性の、奴隷になるだろう。

もっと意味のないことを、堂々としなければならぬ。

1. わたしではなくてもいいことを、わたしがすること

かつて国立市公民館の障害者青年学級を担当していた職員の兼松忠雄は、わいがやが就労の場ではなく、青年活動の場であることにこだわってきたことに触れ、次のように述べている。

しかしそれは、いろいろな町に行って「わいがや」を説明するときが一番理解してもらえないこ

とでもある。曰く、「アルバイトでいくらでも稼げるこのご時勢にあって、何を好き好んで青年がそうした活動を選ぶのか」「単なる喫茶ごっこではないか」(…)など。

それに関連して今でも時々思い出すのは、わたしが関わっていた当時ワイガヤに関わっていた青年の親が彼女に言った言葉だ。

「お前の今やっていることは、それはそれでいいことだとは思。だがしかし、何もお前がそれをやることはないじゃないか」これは、店が終っても夜遅くまで、仲間と飲み屋で話し込んでいる彼女に対して、親としてついつい口をついて出てしまったことだと思う。(…)

その、どこにでもいる、「たぐさんのお前」こそわいがやの財産なのだ。[障害をこえてともに自立する会 2003: 41]

わたしがやらなくても誰かがやること、それがわいがやなのかもしれない。わたしがそれをするそのものに意味はない。わいがやと出会うこと、それは、意味がないこと(!)、あらゆるものが強制された世界から飛び出した先にある経験そのものなのだ。

兼松はわいがやを、「訳のわかん無い喫茶店」と表現する。

就職して、学生時代にマクドナルドでは無くドトールでもない、「わいがや」という訳のわかん無い喫茶店をおれもやっていた、ということを持ちて(?)言えるような場所であってほしい、と思う。多分そんな思いの積み重ねが10年後の「わいがや」を支えてくれるだろう、と思うから。(あるかどうかは知らないが)そして、せめて「まだいい年こいてそんな事」と、今君達の親がいつている口調そのままで、青年たちには言わない人になって欲しいな。[障害をこえてともに自立する会 2003: 45]

このように、兼松はわいがやの意味を繰り返し問い直すとともに、その背景に青年たちの親という存在を度々敏感に捉えようとする。たとえば、国立市に障害者青年教室が設立された1980年、障害を持つ青年たちの経済的自立や

自分のお店を持ちたいといった思いを受けて、喫茶店の営業を青年学級の活動として位置付ける際、「行政だけでなく、親たちとも戦わなければならなかった」と振り返っている[兼松 2021: 31]。

家族という制度から飛び出し、遊ぶことは容易ではない。わいがやをつくるということは、そうした強制された世界の外側をつくる試みでもあったのではないか。

飛び出せ、意味の外部へ。さらに、さらに、もっと遠くへ。

2. 街のキノコと野生の青年たち

強制から自由へ、意味から無意味へと放たれる経験、それがわいがやと出会うということである。この無意味を、ある青年は学歴を介して理解しようとする。

自分が得してきた事があまり役に立たない。学歴とか偏差値とかが全く通用しない。常識を問われたり、そういう面では社会を知らないとか、人との接し方とかでは学歴とかは全く関係ない。今は慣れたけど最初の頃は、そういうのを見せ付けられる事が多かった。それでショックなような…。[障害をこえてともに自立する会 2003: 70]

このように、わいがやとの出会いはわたしたちがこれまで信じてきた意味と、その外部にある無意味が、ある日突然対立してしまう経験でもある。意味の方に強制が、つまり学歴や偏差値、社会や常識があるとして、それでは、無意味の方にはどのような沃野があるのだろうか。批評家の浅田彰は、受験期の読書と大学入学後の読書を比べながら次のように述べている。

むろん、チャート式受験参考書がいいってんじゃないよ。受験体制に即してあらかじめ範囲を限定されたインスタント公害食品から解放されて、森の木の実でも毒キノコでも勝手にツマミ食いできるようになる。これは絶対に必要なことだ。だけど、それ、あくまでもツマミ食いでいいんだよね。(…)ただし毒がないか匂いを調べる

なんていう小心なマネなんかせず、ガブッと一口かじってみること [浅田 1986: 240 - 241]。

本稿では浅田がここで述べている受験期の読書と大学入学後の読書の違いを、意味と無意味の違い、強制と自由の違いを示すものとして用いたい。

当時大学生だった別の青年は、初めて国立市公民館を訪れる前、次のようなやり取りをしていた。

- A「なんかいいことないかな。」
 B「んー、いいバイトの話とか？」
 A「おもしろいことしたいね」
 B「Aさん地元でしょ。公民館っていったことある？」
 A「ないよ、年寄りが集まってんじゃないの」
 B「ポストにお便り入ってたでしょ。読んだ。」
 A「あ、読んだ。なんか得すること書いてあるかと思って」
 B「障害者青年教室って書いてあったよね。」
 A「読んだ。でも怪しいよね。」
 B「そうだよ、怪しいよね。」
 A「でも、一回行ってみたいよね。」
 B「そうだね、行ってみる？」
 A「いつ行く？」
 B「本当に行く？」
 A「ジャンケンで決めて負けた人が、先に見に行ってみるっていうのはどう？」
 B「OK」
 [障害をこえてともに自立する会 2003: 80]

その青年は当時の自分を「学校で教員を目指し、(…)あまり活発じゃない部活動もそれなりにこなして、合コン(…)もそれなりに参加して普通の女子大生のつもり？」[障害をこえてともに自立する会 2003: 80] だったと振り返っている。普通の人には毒かどうかかわからないキノコ(怪しくて、ジャンケンで負けた人が行く場所)が、わいがやなのである。

3. 障害と遊び

国立市公民館のロビーに喫茶店をつくるのが計画された1979年、コーヒーハウス内の

関わり合いだけで完結しない、広くいろいろな市民(障害者・健常者)との交流を目的とした「拡大コーヒーハウス」が開催された[障害をこえてともに自立する会 2003: 9]。

映画鑑賞会の開催から始まったこの取り組みは、当時の青年たちの「地域の中に出ていくべきだ」、「市民の交流を持つべきだ」という問題意識に基づいた継続的な研究会活動を経て、2年後の1981年にわいがやへと発展する[障害をこえてともに自立する会 2003: 9 - 11]。

もちろん、青年たちが目指した交流とは、本稿で述べてきた労働のことではない。決して強制されるものではなく、浅田のものの言い方を借りれば、食べるという行為の手前にある、食べていいものかどうかもわからないような、意味のわからない街のキノコが、わいがやなのである。

それでは、強制された交流とは何だろうか。生まれて間もなく骨形成不全の診断を受けた安積純子は、自身が施設で暮らしていたときの体験を次のように振り返っている。

施設だと他の世界というのがなくて、絶対これが正しいんだっていうふうに大人たちが言ってることから逃れられないんだよね。(…)そこの中で、そこにはいない健常者に近づくことがいいことなんだって、不在の目標に向かって努力することが求められ、中には職員の階層秩序があり、園生のなかにもそれがある。(…)

一年に一回くらいかな、あの頃から交流学習なんて言われて、普通学校の人たちが訪ねてくるんだけど、一年に一回出会ったからって何が変わるかっていうのよね。(…)後で感想文なんか聞かされると、あなたたちの明るい笑顔に心が洗われましたなんて、言われるわけ。いつだって明るい笑顔をしてられるわけじゃないわけだよ。(…)まあ、全く何もないよりはいいんじゃないかって言うけど、何もないよりはいいんじゃないかっていうかたちで人間関係を言ってほしくないよね。[安積 2012: 40 - 41]

安積の回想で興味深いのは、一年に一回という定期的で均質な時間の流れの中に交流学習を

捉えている点である。このことについて、政治学者のジョン・ホロウェイによる時計に関する記述を参照してみたい。ホロウェイは、自分が友人のために楽しく、おいしいケーキを焼いていたはずが、そのケーキを市場で売ろうと決意した瞬間、たちまちケーキを焼くことが労働になってしまう、と述べ [ホロウェイ 2011: 165]、次のように続ける。

時計は持続を、時間の均質化を語る。時計の観点から見れば、一分は次の一分とまったく同じである。時計はぐるぐる回りつつ、時間を量へと還元し、幸福の数分を絶望の数分と同じように扱い、過去を未来へと投影する。時計にとって明日は、今日や昨日とまったく同じになるだろう。(…) 時計はわれわれに、街路で見物するような暇はないことを告げる。(…) そうこうしている内に、われわれはみずからの欲望を犠牲にしなくてはならない。(…) だが時計とはなによりもまず、今を犠牲にする時間、計測された労働の時間であり、時計によって計測されているというだけの理由で楽しむことができない労働の時間である。[ホロウェイ 2011: 171 - 177]

わいがやの運営母体となる障害をこえてともに自立する会が発足した1981年7月、「喫茶コーナー平日実習」がはじまる。「月曜日を除く毎日開かれ、日曜日ごとの実習とは違った充実感を得」[障害をこえてともに自立する会 2003: 10] たその年の12月、喫茶わいがやがオープンする。

毎日、という時間は、今の一分と次の一分が同じではないことを表している。

僕が思うわいがやの印象は、ずばり「映画館」のようなところで、その日その時でいろいろな笑いや感動が生まれます。時には学ぶべきこともしばしばあり、ここは少し自分を成長させてくれる場所のように思います。[障害をこえてともに自立する会 2003: 86]

毎日、という区切りのない時間が、過去と今、そして未来が決して同じことの繰り返しではな

いことを示してくれる。わいがやを営業すること、それは自由で意味のない実践であると同時に、障害者と健常者の交流を定期的な非日常としてではなく、不定期な日常として位置付け直す実践でもあるのだ。

この実践は労働ではない。ここで、安積が回想する施設の、職員と園生という区別や絶対的な正しさを、専門性と言いかえることもできるだろう。思想家のイヴァン・イリイチによれば、「知識の制度化はより一般的で退廃的な妄想をもたらす。それは人々を、自分たちの代わりに知識を生産してもらうことに頼るようにしむける」[イリイチ 2015: 190] が、わたしたちは生まれながらにして「治療したり、慰めたり、移動したり、学んだり、自分の家を建てたり、死者を葬ったりする能力をもっている。(…) 人間が自由にそういう活動を行うことは、労働とはみなされない」[イリイチ 2015: 125] のである。

打越雅祥はわいがやに「素人の魅力」を捉える。

もちろん、外から見てからそんな勝手なことを言えるんで、『わいがや』を切り盛りしている人たちの陰の努力を理解せんかい！と言われそうだが、それでも私は「素人の魅力」というものを感じます。ボランティア活動のような使命感とも違う、やっぱり楽しいから係わっている、いつでも抜けられて、『わいがや』だっていつ休業しても誰も困らない。休業したら公民館の職員は助かったと思うかもしれない。そんなへなちょこぶりが、カッコいいんです。(…) 時々勘違いをした人が、『わいがや』は障害者をダシにして遊んでるんだって怒ることがありますよね。わかってないなあと思うんです。[打越 2003: 43]

障害者をダシにして遊んでいるかのように捉えられてしまうわいがやの日常こそ、労働ではない、自由な交流のあり方ではないだろうか。これこそが、安積が「明るい笑顔」と呼んだものの外部であり、戸惑いや葛藤を含んだ無意味で余計な交流のあり方だからだ。

島本優子は、障害のある男性との出会いを次のように振り返る。

突然、エプロンをした男性が、喫茶わいがやと青年室との間に倒れてしまったのである。同じようにエプロンをした男性が声をかけても、倒れた男性は「動けない」と言うだけで、しばらくあおむけのままになっていた。突然の出来事に驚いた私は、その場に駆け寄ることも、声をかけることもできなかった。

倒れた男性は、どうやら障害のある人のようだった。彼がひとまずは大丈夫そうだということが分ると、周囲の人びとは彼をからかうような雰囲気になり、笑いが起こった。そして、もう一人のエプロンをした男性もお店に戻ってしまい、その男性は倒れたまま一人残されてしまった。[冊子コーヒーハウス編集委員 2019: 37]

できない、という経験によって、倒れたまま一人残された男性が描き出される。助けることが労働だと主張しているわけではない。なにかなをなすことよりも、なにもしないことの方に語る権利が生まれるその瞬間に、労働ではない、遊びとしてのわいがやが現れるということを主張したいのである。

4. 「詩的テロリズム」としてのわいがや

もっと意味のないことを、堂々としなければならぬ。親があなたに付けた名前や、あなたの生れた場所や、生まれてからこれまでの年月や、デートやセックスの回数、年収、諦めてしまった夢、うれしかったこと、かなしかったこと、失ってしまった数々のものは、あなた自身のことを表さない。それよりも、あなたが堂々と遊ぶことで生まれる無数の出会いに注意を払わなければならない。あなたの両親や親友や恋人には伝わらなくても、知らない誰かがあなたの遊ぶ姿をみている。このとき、あなたは世界の意味を退け、無意味を呼び戻す確信犯となる。遊びとは、詩的テロリズムなのだ。

「詩的テロリズム」は、自分以外のアーティストたちにではなく、あなたがしてきたことがア

トであることを（少なくともほんのわずかなあいだでも）理解しないであろう人々のために行なうこと。見覚えのあるアートのカテゴリーや政治運動は避けること、議論するためにうろついてはならないし、感傷的になってもならず、無慈悲に、危険を冒し、貶め〈ねばならない〉ものだけをぶち壊し、子どもたちが一生覚えているようなことをせよ [ベイ 1997: 20]

ハンドドリップや皿洗いを、接客や喧嘩を、あくびを、笑いを、怒りを、奇声を、全てを肯定せよ。これは労働ではない。喫茶わいがやである。

【参考文献】

- 安積純子
2012 「〈私〉へ——三〇年について」『生の技法 [第3版] ——家と施設を出て暮らす障害者の社会学』、生活書院。
- 浅田彰
1985 『逃走論』 筑摩書房。
- イリイチ、イヴァン
2015 『コンヴィヴィアリティのための道具』 渡辺京二、渡辺梨佐 (訳)、筑摩書房。
- 兼松忠雄
2021 「喫茶は『出窓』から『玄関』へ——全国喫茶コーナー交流会の30年」『月刊社会教育』(777)。障害をこえてともに自立する会
- 2003 『わいがや大百科』 障害をこえてともに自立する会。
- 冊子コーヒーハウス編集委員
2019 『コーヒーハウス』(71)、冊子コーヒーハウス編集委員。
- ブラック、ボブ
2014 『労働廃絶論』 高橋幸彦 (訳)、『アナキズム叢書』刊行会。
- ベイ、ハキム
1997 『T A Z———時的自律ゾーン』 箕輪裕 (訳)、インパクト出版会。
- ホロウエイ、ジョン
2011 『革命——資本主義に亀裂を入れる』 高祖岩三郎・篠原雅武 (訳)、河出書房新社。

(いりやま・しょう= 1992年生。会員歴：2013年～現在に至る。人文系の在野研究者。身体的にも社会的にも運動は得意ではないが、世界を救うのはマチズモではなく言葉だと思っている。現在の研究関心は当事者論、共産主義と民俗学、フェミニズムと異性愛における男性非モテ。アルコールに依存しながら暮らす、タバコは去年やめられたのでえらい。)

いつでもある「出窓」として

兼松 忠雄

開店 40 周年、おめでとうございます。

よそでわいがやの話をする、よく聞かれるのが「なぜそんなに続いているのか」ということです。障害者のためだけでなく、かといって青年のためでもない、この不思議な空間を説明するのは、実はなかなか骨が折れるのです。

現地を見た人はわかるのですが、隣にある「青年室」という不思議な空間は、わいがやとの間を一枚のドアで行き来できるようになっています。そうわいがやはこの部屋で生まれ、わいがやという「出窓」を通じて、青年が「障害」のことを当事者と付き合うことで「何となく」知り、社会に巣立っていく仕組みを提供しているのです。

元祖わいがやがオープン以降、同じような「障害者が働く喫茶コーナー」は、県庁や市役所、公民館といった公共施設に限らず今では全国に 950 箇所近くできてきています。「喫茶」という機能が、コーヒーを飲むだけでなく、かつてのロンドンでの「コーヒーハウス」のように、街の人たちが集い、議論し、コミュニティを形成する大事な場所として認知されてきたのも、こうした事業所としての喫茶が

増えている要因となっているのだと思います。また、アビリンピック（全国障害者技能大会）での接客サービス種目の登場や、特別支援学校での接客サービスを授業に取り入れるところが増加し、喫茶が就労の場としても認知されて来たことも見逃せない点です。

こんなにも「喫茶」が普通の光景になるうとは、わいがやを始めたころには全く考えられないことで、改めて始めたころの青年たちに拍手したいと思います。

それなのに、というかそれだからというか、わいがやのように NPO でもなく、法人でもなく、青年たちが細々と運営している喫茶はいまだかつて聞かないのです。

だからこそ、スタッフ不足に悩まされながらも、今まで同様きわめて日常的な風景として、公民館の中の喫茶として、わいがやが店を開け続けてくれることを願いたいのです。

最後に、このわいがや 40 年の歴史の陰には、この店を開店するにあたって協力いただいた関係者の方々がいたことを忘れてほしいと思います。そして、改めてコーヒーを飲むことを通じ、こうした活動をやさしく見守り、育ててくれた国立市民の皆さんに心から感謝したいと思います。

(かねまつ・ただお=全国喫茶コーナー交流会事務局長、明治大学講師)

写真で見る喫茶わいがや⑤

本棚とレコードプレーヤー



わいがやの店内奥、テーブル席の棚は、ちょっとほこりっぽくて雑然としている。そこに並んでいる本やレコードは昔からほとんど

変わらない 80～00 年代のラインナップだけど、おっ！と思わず手に取りたくなる本が混じっている。レコードプレーヤーは今もちゃんと動くと思うけど、店では主に隣の CD プレイヤーなどから BGM が流れている。(井口啓太郎)



(写真：和田萌花撮影)

書ききれないほどの楽しい思い出

林 雄三

内気で人見知りな自分が一人暮らしを始めて人との関わりがさらに減った頃に高校の後輩がコーヒーハウスへ誘ってくれた。

初めて行った合宿で当時のわいがやの会長がわいがやへ誘ってくれて、人見知りの僕なんかをわいあんの幹事に抜擢してくれた。

不安から自分の個性を武器に変えてくれるわいがや、間違えや、過剰な思いも、理解して寄り添ってくれた仲間、全てに出会えて今いられる。

あと、2000文字書きたい、それ以上書きたいくらいに楽しい時間と学びの時間を経験させていただきました。

関わったときのわいがやはスタッフの持ち味で居酒屋、ジャズバー、相談所などなどに変化してスタッフの持ち味で来るお客の変わる不思議な空間だなと思いました。

僕の時はずいぶんBUMP OF CHICKENしか流して無かったので細い感じでした(^_^;)

(はやし・ゆうぞう=福生市在住/航空エンジンの修理開発。24歳~34歳のころわいがやに関わっていました。)

実は…

藤江 竜三

わいがやへガッツリかかわっていたのは、10年前。がむしやりにコーヒーを淹れまくった。お客様の笑顔のため、売り上げをあげるため、みんなのためにコーヒーを淹れまくった。美味しいコーヒーの蘊蓄も語れるようになった。そしていろいろなお店のコーヒーを飲んだ。様々なコーヒー豆も試した。コーヒーのスイーツだって作った。コーヒーのためにできることはやった。でもやっぱり自分は紅茶の方が好きなのだ。

(ふじえ・りゅうぞう=国立市議会議員。2010年代にわいがや専従。)

カウンターの向こう側に導かれて

比嘉 健太

東京に住まいを移して5年を過ぎた。何かの縁で国立にたどり着き、色々なご縁でコーヒーハウスにたどり着いた。

カウンターの向こうに立っていたのは入山さん、そしてそのとなりで座っていたのは斉子さん。最初は居心地のいいお店だなあ…と思ってここの常連になろうかなって思っていたら私は「カウンターの向こう側」に立っていた。

これも何かの縁なのかな、何かに導かれて今ここにいるのかなとお店番のたびに考える。私の後にも何かの縁で「カウンターの向こう側」に導かれた人と出会う。この出会いと縁はとても貴重な財産に違いない。

(ひが・けんた=1991年沖縄県生まれ、沖縄育ち。2015年4月より国立市在住、この頃より喫茶わいがやをはじめとしたコーヒーハウスの活動に関わり始め現在に至る。)

目の前のことにどう関わるか

藤井 知子

40周年、おめでとうございます。

仕事を辞めて専業主婦になって、最近「仕事をするだけで社会に関わることはない」と感じています。所属や役割や肩書きが無くても社会の一員。

大切なのは様々な場面で、目の前のことにどの程度、どう関わるか、自分の感覚で決めること。

わいがやの皆さんが当たり前やってきたことですね。

色々な関わり方があって、成り立つ場。つくづく素敵なお店だと思います。

(ふじい・ともこ=平成22年度から4年間、職員として関わらせていただきました。有意義な時間でした。)

写真で見る喫茶わいがや⑥
喫茶わいがやの物と「DiY」



喫茶わいがやのコーヒーカップとお皿は、「しょうがいしゃ青年教室」の陶芸講座で、参加者が制作した作品だ。毎年、市民交流ロビーで作品展が開催され、その展示作品からスタッフがいくつかを選び、制作者にお店への提供をお願いしている。一つとして同じサイズのカップがないオリジナルの作品群。ちなみに、現在の食器棚も青年室のDIYをテーマにした部活動で2018年頃制作されたもの。DIYといえば、この店内や青年室の木箱のような四角の椅子も手作りのようだ。一時期、お客さんの座り心地が良くなるように背もたれのある椅子を購入してはどうか、といった議論もあったが、重ねたりサイドテーブルにしたりできる用途の幅広さや使い続けてきた愛着(?)によって今もこの椅子が使用されている。コルクボードに吊り下げられているメニューボードも手作り。

わいがやや青年室では、自分たちの手で作った＝DIYの物が長く使われている。このDIYは、お父さんが工具を買い揃えて快適な住まいづくりに張り切るような「日曜大工」のイメージではない。過去の同じ場にいた誰かがつくった物を大切に使い続けること、生活に関わる物をじぶんたちでつくる活動を続けること、それはじぶんたちで「やってみる」という実践、じぶんたちで文化を生み出す、という意味でのDIYだといえないだろうか。毛利嘉孝さんは、「じぶんでやってみよう！」という意味での「DiY」を他と区別するために「I」を小文字にして、「じぶんたちの生活を取り返す方法を考えることがDiY」だと言っている（毛利嘉孝『はじめてのDiY』ブルース・インターアクションズ、2008年）。これ、わいがやという店の精神的態度や実践にも共通している気がする。（井口啓太郎）

（写真：和田萌花撮影）

